第１章　基本構想検討条件の整理

基本構想を検討するにあたり、長久手の歴史や市内の史跡等の分布、祭事等の歴史的要素を整理し、またまちづくりの観点から関連する上位計画等を以下に整理する。

１．歴史的条件

１）小牧・長久手の戦い

（１）小牧・長久手の戦い

織田信長亡き後、羽柴（のちの豊臣）秀吉と織田信雄・徳川家康が天下をかけて戦ったのが、「小牧・長久手の戦い」である。

織田信長が本能寺の変で倒れ、その後継者争いに端を発した政争の中で、勢力を強めていく秀吉。脅威を感じた信長の次男信雄は、織田家同盟の実力者・家康を頼り、家康もこれに応じた。

天正 12 年（1584）３月、挙兵した両軍は、当面は信雄の本陣のある北伊勢を戦闘場所と想定していたが、池田恒興（勝入）と森長可が犬山城（愛知県犬山市）を落としたことで、家康軍も北尾張へ急遽転戦。羽黒（犬山市）まで進んできた森軍を、家康の部将酒井忠次らが破り、形勢を立て直した（「羽黒の戦い」）。その後、両軍は小牧（愛知県小牧市）でにらみ合うことになった。

膠着状態を破って、先に動いたのは秀吉軍であった。三好信吉（のちの豊臣秀次）を総大将とする別働隊を長久手方面へ送ったが、その動きを察知した家康も、軍を動かし攻撃したのである。

こうして４月９日、長久手で激しい戦闘がおこり、この戦いで秀吉軍は池田恒興・元助（庄九郎）父子、森長可ら有力な部将を失い、家康軍が勝利した。しかし、その後、秀吉は信雄と和睦し、家康を臣従させ、天下人としての地位を確立した。

長久手合戦図屏風（抜粋）

（豊田市所蔵（浦野家旧蔵））

（2）長久手合戦

◆発端

天正 10 年（1582）6 月、織田信長が家臣の明智光秀の手にかかり、本能寺で討たれた。そのとき、信長の三男信孝を大将に、光秀討伐軍を指揮したのが、羽柴（のちの豊臣）秀吉である。秀吉は、信長の後継者を決める清洲会議からしばらくすると、柴田勝家と対立し、天正 11 年賤ケ岳の戦いで破った。こうした中で、信長の次男信雄は、当初は秀吉と友好関係をもったものの、信孝が秀吉に岐阜城を追われ自害した後からは警戒心をもつようになった。信長の後継者の立場を事実上確立した秀吉に対し、不満を感じる信雄は、織田家の同盟者であった徳川家康に助けを求めた。

家康は、いつかは秀吉と対決しなければならないと考えていたので、これに応じた。天正 12 年 3 月 6 日、信雄が秀吉に内通していた三人の家老を殺害したことで、「小牧・長久手の戦い」は始まった。

◆主戦場は尾張に

秀吉そして家康・信雄の両者とも、当面は伊勢国、特に信雄の本拠長島城（三重県桑名市）のある北伊勢を戦闘場所と想定していた。しかし、家康・信雄の予想に反し、美濃国大垣城主・池田恒興（勝入）と美濃国金山城主・森長可が犬山城（愛知県犬山市）を攻撃、落城させた。慌てた家康は、池田・森の侵攻を防ぐため、自軍の一部を北伊勢から北尾張へ急遽転戦。天正 12 年（1584）3 月 17 日、羽黒（犬山市）まで陣を進めてきた森軍を、家康の部将酒井忠次らが敗って、形勢を立て直した〔羽黒の戦い〕。一方、北伊勢では秀吉軍への守りが不足し、信雄領伊勢国の南半分は、ほぼ壊滅状態となった。

羽黒で敗戦したものの、敵地犬山に拠点をもつことに成功した秀吉は、楽田（犬山市）に着陣、周辺に砦を築いた。楽田から南方約 4.5km の小牧山（愛知県小牧市）に家康も陣を移し、近辺に砦を作った。信雄も長島から小牧山に移った。両者の当初の思惑に反し、主戦場は尾張国内へ移り、お互いが出方をうかがうという状況になった。

また、諸国へもこの戦いの様相が伝えられ、両将からの呼びかけに呼応し合戦に至った地域もある。秀吉方、織田・徳川方のどちらにつくか。この戦いは、日本中へ大きな影響をおよぼした。

長久手合戦図屏風（抜粋）

（豊田市所蔵（浦野家旧蔵））

第3章　基本構想

第１章で整理した歴史的条件、まちづくり条件からみた前提条件及び第２章で整理したワークショップ等の結果、さらに有識者会議での討議事項等を踏まえ、古戦場公園の再整備にあたっての基本構想を以下のとおりとする。

１）古戦場公園の位置づけ

■歴史的条件からみた位置づけ

【歴史の大舞台】

羽柴（のちの豊臣）秀吉と徳川家康が直接戦った「小牧・長久手の戦い」は、のちの徳川政権樹立へ向けての足がかりとなったという点で、我が国の近世史の夜明けを告げる大きな出来事であり、その主戦場となった長久手古戦場は、「武士の歴史」の大舞台として位置づけられる。

現在、国指定史跡の長久手古戦場は、江戸時代以降、合戦をしのび訪れた尾張藩士や地元の人達により石柱や碑が建てられ、後世に残そうと守られてきた。このことからも、「長久手の郷土の記憶」が守られてきた意義は大きい。

【長久手の原風景「里山回廊」と農民の生活文化】

長久手古戦場周辺は、本市を形成する長湫、岩作、上郷の３つの地区が接する位置にある。明治時代後期、陸軍測地部（現在の国土地理院）が測量した地図をみると、香流川に代表される河川に沿って、農地、里山、集落が連なっており、これが「長久手合戦」の舞台となった地域の原風景であったと推測される。現在の長久手市は、都市化が進んではいるものの、市域東部には、この「長久手の原風景」がいまもなお残されている。

また、秀吉と家康、両雄の対決という歴史上の表舞台の影では、無数の農民が兵士としてこれを支えている。「警固祭り」「棒の手」は、本地域に脈々と受け継がれ、無形民俗文化財として現在まで伝わっている。これらは、農民の生活文化を伝えるものであり、「長久手合戦」という歴史的な背景とともに、重要な文化的背景といえる。

■まちづくり条件からみた位置づけ

【都市の中心部に位置するシンボル・コア】

古戦場公園の周辺は、長久手市のほぼ中央部に位置し、新たな都市核「シンボル・コア」としての位置づけがされている。

「シンボル・コア」においては、長久手古戦場駅を中心として、住宅、商業、交流機能の複合機能拠点の形成を目指しており、特に「リニモテラス」（観光情報発信や大学をはじめとする連携の場、多くの人が集まるイベントの場）の形成により、さまざまな主体が連携する機能が備わることとなる。また、大規模商業施設の立地も予定されており、市の内外から多くの人が集まる地区となることから、長久手の新しい「まちの顔」となるべき地区である。

こうしたなか古戦場公園は、「古戦場の記憶」という全国でも事例が少ない歴史的特性を活かした、長久手らしさのある顔づくりが求められる。

【地域をめぐり体感する、新たな観光スタイル実践の場】

市民が快適に、住み心地よく楽しく暮らし、自ら住む地域に誇りを持てること、市民と来訪者が心豊かに交流し、来訪者にとっても居心地のいいまちにしていくことは、経済的な豊かさよりも精神的な豊かさが大切とされていくなかで、今後ますます重要度を増していくまちづくりの理念といえる。

このための方策のひとつとして、歴史、文化、生活、自然など地域の社会環境と自然環境の特色をまるごと博物館にみたて、現地で保存、育成、展示するという「フィールドミュージアム」という取り組みがある。行政と住民が一緒に構想し、運営していくことにより、地域の歴史・文化・生活などを住民が自ら認識する場であるとともに、来訪者に地域のことを理解してもらうための場ともなる。

古戦場公園で得る情報や知識をもとに長久手合戦の歴史を体感・想像し、ここを起点として市内に点在する長久手合戦に関わる文化財、香流川に沿った里山回廊、古いまちなみの風情と自然環境が残る岩作地区をめぐるなど、「地域をめぐり体感する」という新たな観光スタイルを実践していくうえで、古戦場公園を拠点施設として位置づける。

2）ワークショップ、有識者会議の結果から得られた方向性

■古戦場公園と郷土資料室の性格

・小牧・長久手の戦いの歴史的意義を踏まえ、古戦場に特化した公園づくりが重要であり、公園と郷土資料室の再整備にあたっては、長久手合戦の理解を深め、興味をもってもらうことを第一の目的とする。また、「警固祭り」「棒の手」をはじめとする農民の生活文化をはじめ、郷土の資料に接する場とする。

・歴史資料の展示は、小牧・長久手の戦いの歴史的経緯、長久手合戦の一日の流れと軍勢の動き、小牧、犬山などとの関係など史実をわかりやすく伝える。また、その時代の衣食住が体験できるなど、子どもも楽しく歴史を学べる機能を併せ持った施設とする。

■空間構成と施設整備のあり方

・長久手古戦場駅やグリーンロードから、そこが古戦場公園であることが一目でわかるよう景観に配慮し、古戦場の歴史にふさわしいランドマークを配置する。

・長久手合戦を踏まえ、シンプルな空間の中で合戦を体感し、想像力をかきたてる空間構成とする。公園内の自然地形を活かし、施設がそのなかに溶け込む形としたり、当時の素材に近づけるなどの配慮を行う。

■自然環境・景観

・文化財保護法に基づき、国指定史跡は現状を維持するとともに、公園全体として緑豊かな公園づくりを目指す。桜の木の維持管理をはじめ、古戦場らしい空間で市民が憩える公園とする。

・古戦場公園の再整備にあたって、古戦場の歴史にふさわしい景観形成を図る。

■他施設・他地域との連携

- リニモテラスとの機能分担や大規模商業施設の利用者への情報発信など、隣接する施設との連携により古戦場公園の機能を高め、利用促進を図る。
- リニモの利用促進による環境にやさしい交通体系の維持と古戦場公園を核とした市内をめぐる観光振興としての連携を図る。
- 市内に点在する長久手合戦にまつわる史跡、ござらっせ・あぐりん村や文化の家など他の拠点施設とのネットワーク、岩作のまちなみとの連携などにより、市全体をめぐるネットワークの拠点として位置づけ、市内をめぐりたくなる情報発信を行う。
- 犬山、小牧など「小牧・長久手の戦い」に関係する他都市との連携、姉妹都市ワーテルローの古戦場との連携など他地域との連携を図る。
- さまざまな人の関わりにより、持続的に古戦場公園を維持、管理するとともに、イベント開催や、古戦場グッズの考案・販売などに多様なアイデアを取り入れる。

３）古戦場公園再整備のテーマと基本コンセプト

長久手の地域まるごと博物館の形成を見据えた、古戦場公園の施設再整備にあたっての基本的考え方を以下のとおりとする。

【テーマ】

《家康が動き、歴史が動いた。ここ長久手で。》

～古戦場をめぐり、体感する。訪れてみたくなるフィールドミュージアム～

~~【基本コンセプト】~~

古戦場公園を「訪れてみたい」「体験してみたい」施設として、持続的に魅力づくりを行う「歴史を体感するフィールドミュージアム（野外博物館）」として位置づける。色金山歴史公園、ござらっせ・あぐりん村、文化の家その他市内の拠点施設、岩作のまちなみや「警固祭り」、「棒の手」といった地域の祭事などとの連携も図っていく。

【基本コンセプト】

《シンボル・コアに「顔」をつくる》

～「古戦場の記憶」という、長久手ならではのアイデンティティを活かす～

- 「古戦場の歴史」「新たな都市文化の出会い」をテーマに。
- 古戦場公園、リニモテラス、大規模商業施設等が連携して多くの市民が集まり活動し、地域情報を外部へ発信する地区を形成する。

■古戦場公園再整備の基本コンセプト

《秀吉と家康が戦い、歴史が動いた。ここ長久手で。》

～古戦場をめぐり、体感する。訪れてみたくなるフィールドミュージアム～

長久手の地域まるごと歴史博物館の形成を見据えた、古戦場公園の施設再整備構想

長久手の「郷土の記憶」

「古戦場の史跡」プラス「地域一帯の田園風景」

岩作から上郷にかけての地域一帯の自然地形（里山と香流川）と農業集落の生活文化が総体となって「小牧・長久手の戦い」の記憶をしるしている。

■基盤となる位置づけ

「歴史の大舞台」

羽柴（のちの豊臣）秀吉と徳川家康が直接戦った「小牧・長久手の戦い」は、我が国の近世史の大きな出来事であり、長久手古戦場は 1584 年、この戦いの主戦場となった**「武士の歴史」の舞台**である。

長久手の原風景「里山回廊」と農民の生活文化

- 長久手古戦場周辺は、長湫、岩作、上郷、３つの地区の接点であり、香流川に代表される水辺空間とそれに沿った農地、里山、集落が、上記の「武士の歴史」の舞台となる原風景として残っていた。
- 武士の歴史の影でそれを支えた**「農民の生活文化」**が、「警固祭り」「棒の手」などの祭事等として継承されている。

■今後付加されていく位置づけ（新たな都市拠点機能の配置）

「リニモテラス」（＋大規模商業施設）

観光に関する情報発信の場、大学をはじめとする連携の場、多くの人が集まるイベントの場

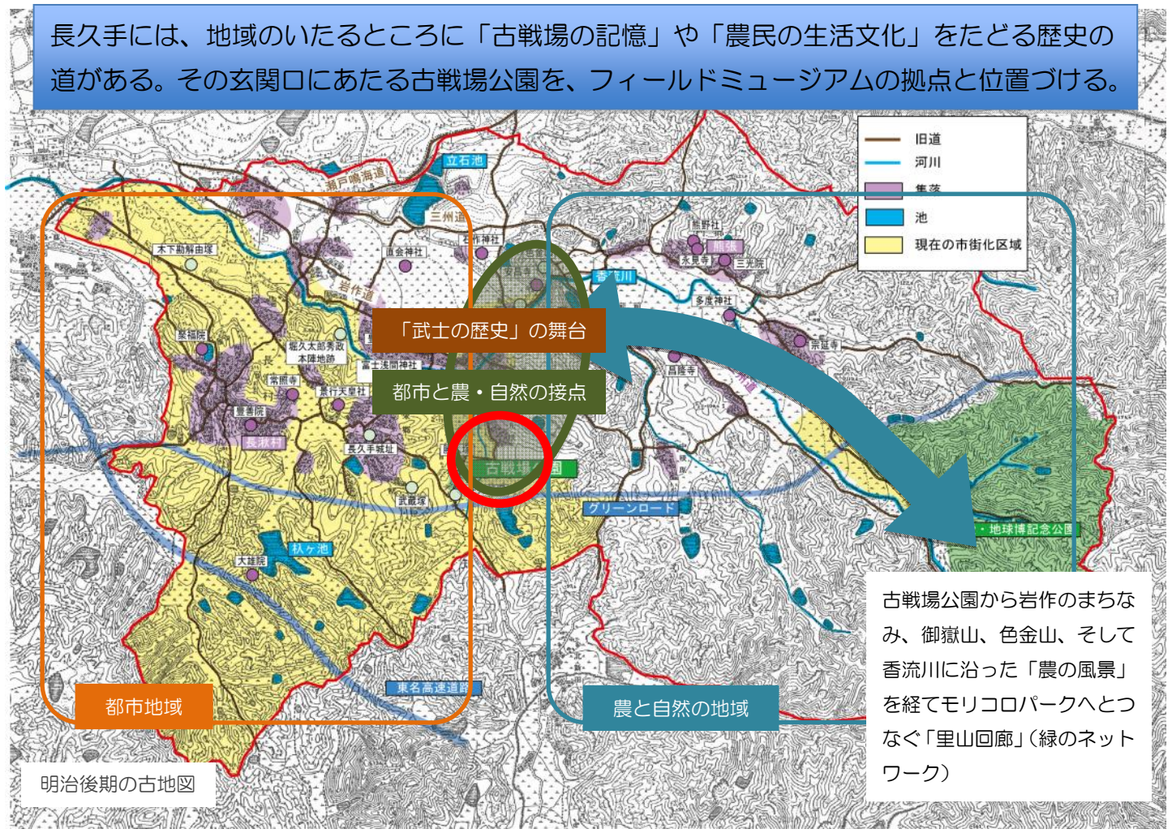
■古戦場公園再整備~~と周辺地区のまちづくり~~の基本コンセプト

《シンボル・コアに「顔」をつくる》

～「古戦場の記憶」という、長久手ならではのアイデンティティを活かす～

- 「古戦場の歴史」「新たな都市文化の出会い」をテーマに。
- 古戦場公園、リニモテラス、大規模商業施設等が連携して多くの市民が集まり活動し、地域情報を外部へ発信する地区を形成する。

長久手には、地域のいたるところに「古戦場の記憶」や「農民の生活文化」をたどる歴史の道がある。その玄関口にあたる古戦場公園を、フィールドミュージアムの拠点と位置づける。



明治後期の古地図

【フィールドミュージアムとは？】
「エコミュージアム」とも呼ばれる。歴史、文化、生活、自然など、地域の社会環境と自然環境の特色をまるごと現地で保存、育成、展示する博物館の形態であり、行政と住民が一緒に構想し、運営していくことにより、地域の歴史・文化・生活などを住民が自ら認識する場であるとともに、来訪者に地域のことを理解してもらうための場でもある。
（文部科学省資料「エコミュージアムについて」より抜粋・編集）

4）古戦場公園再整備の基本方針

～古戦場をめぐり、体感する。訪れてみたくなるフィールドミュージアム～の基本方針を、以下のように整理する。

■「歴史を知る・学ぶ」、「自然の中で憩う・遊ぶ」、「交流する」という３つの機能別の整備方針

■「古戦場公園」の再整備の方針と、「関連する他の地区、施設」との連携の方針

方針 ３つの機能	古戦場公園の再整備の方針	関連する他の地区、施設との連携の方針
１） 歴史を知る・学ぶ	**１．郷土資料室のリニューアル（歴史資料の整理）** ・長久手合戦の歴史を知り、市内を巡ってみたくなるような情報を伝える ・長久手合戦の一日の時間の流れに沿った情報を伝える ・古戦場の歴史をメインとし、その他郷土の歴史も伝える **２．公園のリニューアル** ・古戦場のイメージを伝えられる、できるだけシンプルな空間構成とする ・長久手古戦場駅やグリーンロードなどからみた景観に配慮し、古戦場の歴史にふさわしいランドマークをつくる ・古い家屋の活用や当時の素材、工法を用いるなど、歴史に配慮した施設とする **３．利用促進** ・当時を偲ばせる食や生活文化の体験ができる場をつくる ・伝統的な祭やイベントの開催の場として活用する	**１．既存施設の連携** ・長久手合戦にまつわる市内の他の史跡や、長久手の原風景を残す岩作集落などを巡る歴史散策ルートをつくる ・犬山、小牧など「小牧・長久手の戦い」に関連する諸都市と連携する ・姉妹都市ワーテルローとの「古戦場の歴史・生活文化」をテーマとした国際交流を図る **２．歴史をキーワードにした連携** ・市民サークルや大学などとの連携により、歴史を学ぶ活動を多様に展開する ・古戦場の歴史にちなんだみやげ物をつくる ・古戦場公園の周辺地区全体として、古戦場の歴史にふさわしい景観をつくるよう連携を呼びかける（駅前広場、リニモテラス、大規模商業施設等）
２） 自然の中で憩う・遊ぶ	**１．歴史と自然が共存した公園** ・自然環境に配慮し、歴史と自然のバランスがとれた公園とする **２．日常でもイベント時でも楽しめる公園** ・さまざまな世代が緑のなかでピクニックするなど、憩うことができる公園とする ・~~四季折々の~~自然を愛でることができるイベント開催の場とする	**１．周辺の樹林地や公園、香流川と結ぶ** ・色金山をはじめ、他の公園と結ぶ緑のネットワークをつくる ・香流川との連携や香桶川の緑道づくりなどによる里山回廊めぐりのルートをつくる **２．他の施設との連携** ・他の公園などでの自然に親しむイベントとの連携
３） 交流する	**１．イベントによる交流の場づくり** ・歴史、食べ物等に係るイベントの開催などにより、さまざまな世代が集い楽しめる場をつくる **２．施設での交流や体験の場づくり** ・くど、囲炉裏を使う体験をはじめ、昔の「衣食住」に関する生活体験をするなど、お年寄りが子どもたちに伝統文化を伝えたり、楽しみながら交流できる場をつくる **３．住民参加によるリピーター、サポーターづくり** ・多くの市民が公園づくりや維持・管理、歴史体験の活動などに参加することにより、古戦場公園のリピーターやサポーターを増やす **４．自動車利用者への対応** ・アクセス路や駐車場の整備により、訪れやすい公園とする	**１．イベントによる交流と情報発信** ・周辺での他のイベントと連携する ・古戦場公園に関する情報を発信する **２．周辺施設等との連携** ・大規模商業施設の買い物客に興味を持ってもらえる機会をつくる ・駅前広場のイベントスペースと連携する ・リニモテラスを活用し、交流事業や情報発信を行う ・ござらっせ等を通じ、地域の農業や食と連携する **３．公共交通の利用促進の取り組みとの連携** ・リニモの利用促進と古戦場公園の利用促進がタイアップしてアピールする ・N-バスを活用し、誰でも歴史散策しやすい移動手段を確保する

5）ゾーンごとの再整備の方針

西側ゾーン

（歴史情報発信と体験・交流のゾーン）

- 資料館（東側施設との連携・補完により、火縄銃など古戦場にまつわる資料をはじめ郷土資料を収蔵、展示）
  - 体験施設、休憩、飲食施設
- 広場（歴史や生活文化の体験的な遊び）
- 古戦場らしい植栽・緑化

東側ゾーン（古戦場を体感するシンボリックなゾーン）

- テーマを「古戦場」に絞る
- 古戦場を体感できる、できるだけシンプルな空間構成
- 古戦場らしさのあるランドマークの配置
- 古戦場の基本的案内（ガイダンス）機能を備えた施設
- 施設は、できるだけ目立たない形で再整備
- 古戦場らしい植栽・緑化
- ピクニックができ、祭りの場ともなる空間
- 一部は駐車場利用
- 和弓場については、西側ゾーンへの移設も含め、新たな場所の提供を検討する

史跡保存ゾーン

（自然環境を保全するゾーン）

- 文化財保護法に基づき、地形、樹木など現状を保全
- 木々が繁る雑木林の空間を守る
- 飛び地となっている庄九郎塚周辺との一体性を確保する

縮景活用ゾーン

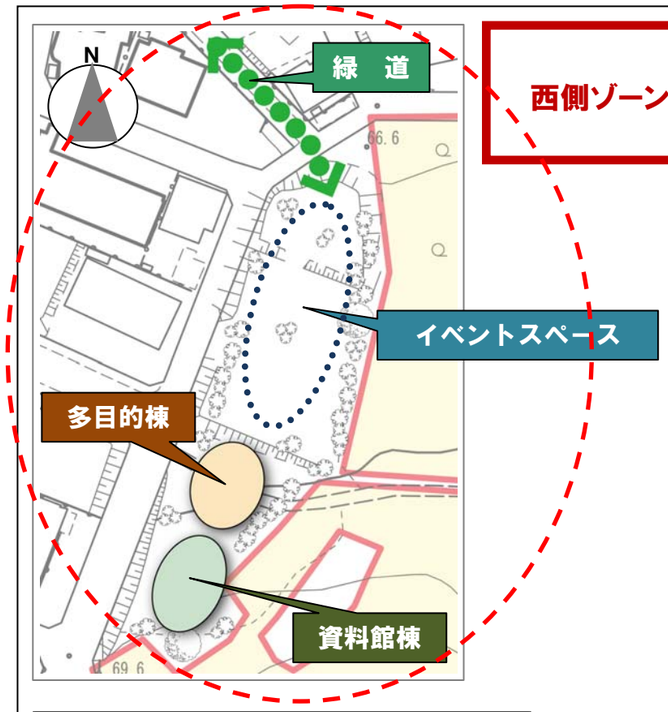
- 縮景全体を俯瞰できる場所で、風景をよりわかりやすく見せることにより、ガイダンス機能を強化する
- 「東側ゾーン」との一体的な利用により、古戦場を体感できる広々とした空間として活かす

エントランスゾーン

- グリーンロードから人を引き込む仕掛けを行う
- 既存モニュメントの活用方法の検討

6）機能配置と施設整備の方針

西側ゾーンの機能配置と施設のイメージ案



ゾーンの空間イメージ

- 周囲を木々で囲まれた落ち着いた空間とする
- 建築物については、木造を基本とし、歴史を感じさせる素材や工法を用いた造りとする
- 隣接する住宅地の環境に配慮する

■資料館棟

- 収蔵品の展示などを通じて小牧・長久手の戦い、長久手合戦の歴史を知るための施設
- 古窯や亜炭など古戦場以外の郷土資料の展示
- 講演会などの開催スペース

■多目的棟

- 資料館棟を補完し、小牧・長久手の戦い、長久手合戦と農民の生活文化の歴史を楽しみながら学べるセミナーやものづくりの体験ワークショップ等の開催スペース
- ミュージアムショップ機能
- カフェ機能　など

■イベントスペース

- 小規模な交流イベント、体験ワークショップなどに利用

歴史的な素材を用いた資料館施設の事例

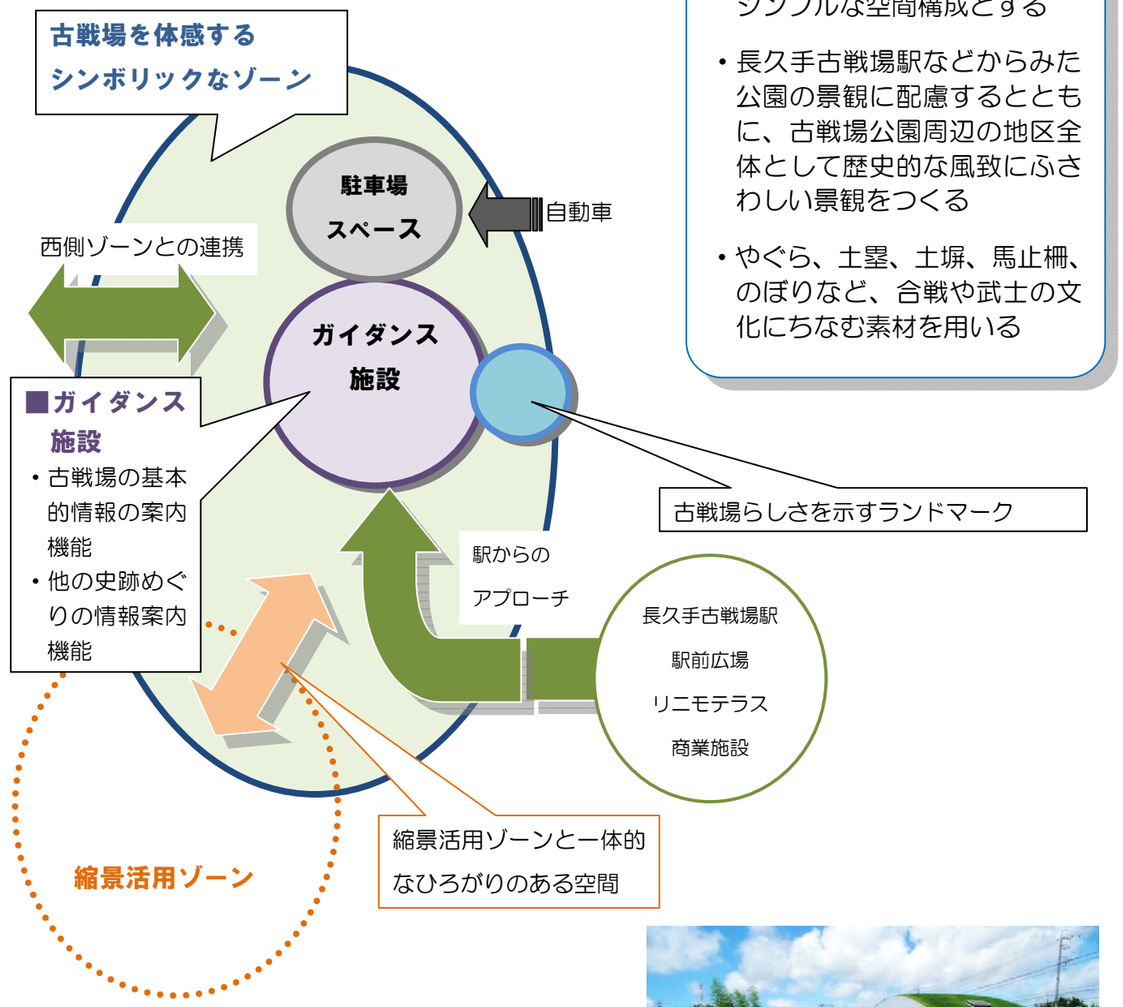
高井鴻山記念館（小布施）

高井鴻山記念館から北斎亭まで続く「栗の小経」

東側ゾーンの機能配置と施設のイメージ案

ゾーンの空間イメージ

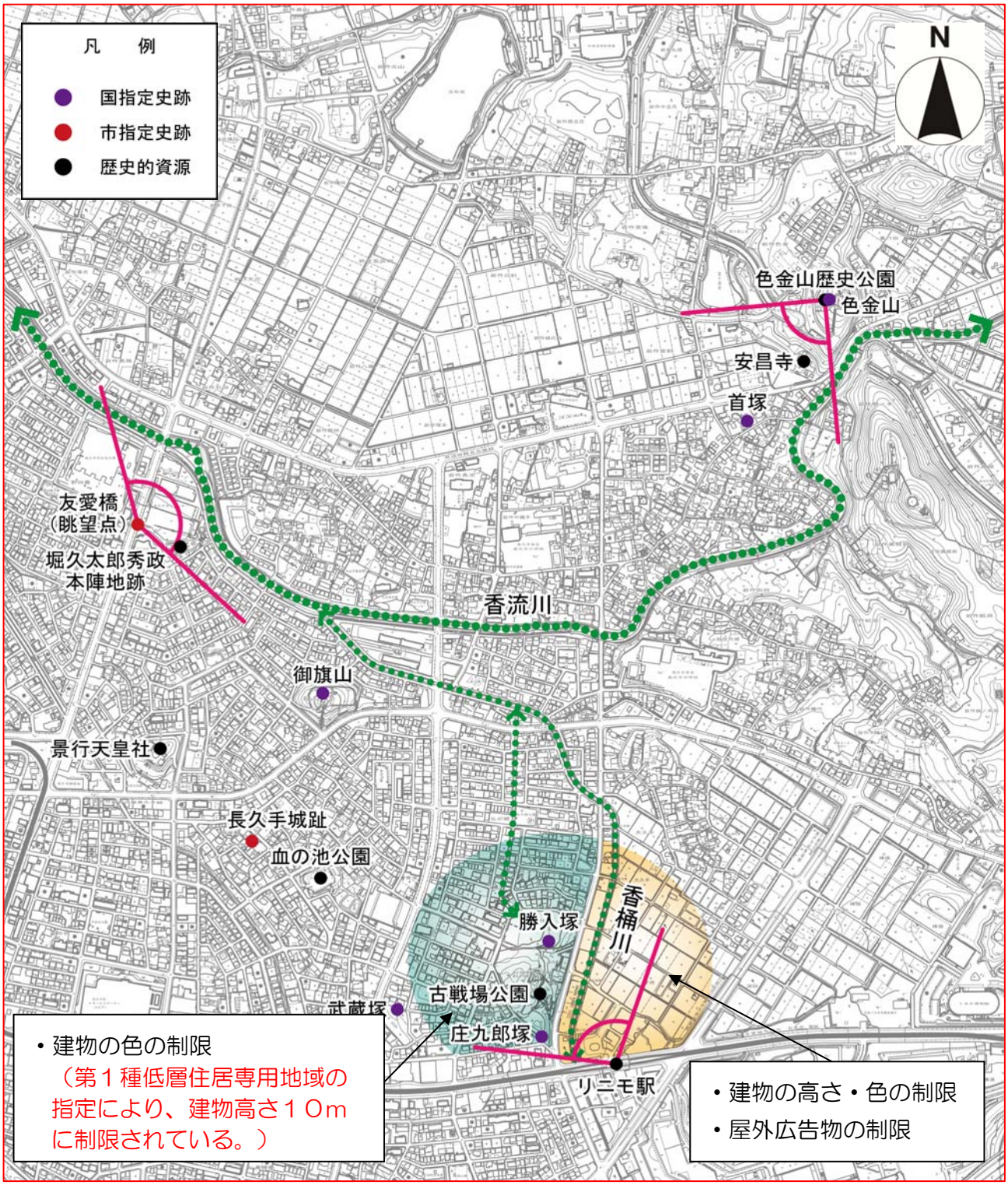
- 地形の起伏を活かし、古戦場を体感できる空間とする
- 建築物があまり目立たない、シンプルな空間構成とする
- 長久手古戦場駅などからみた公園の景観に配慮するとともに、古戦場公園周辺の地区全体として歴史的な風致にふさわしい景観をつくる
- やぐら、土塁、土塀、馬止柵、のぼりなど、合戦や武士の文化にちなむ素材を用いる



地形の起伏を活かした半地下式の施設の事例

新美南吉記念館（半田）

7）古戦場公園周辺のネットワーク及び周辺の建物のあり方

・古戦場公園周辺の歴史的資源を緑道や香流川を利用して、ネットワークさせて結び、古戦場地域内の周遊性を高める。

・古戦場公園周辺については、建物の高さや色彩に制限を設けるなど、景観への配慮を今後検討していく必要がある。
特に、古戦場公園東側については、屋外広告物の制限の強化を合わせて検討する。